

平成19年度 農業総合センター 研究第三者評価会議 評価結果

平成19年11月5日奈良県農業総合センター研究第三者評価会議が当センター内農業交流館で開催されました。これは、研究活動の公正かつ適切な評価により、効果的な研究・技術開発を推進する目的で平成18年度から導入したものです。その結果の概要をお知らせします。評価会議は農業に関する有識者・専門家、農業者・消費者の代表等、知事から委嘱を受けた5名の評価委員をもって構成しています。

評価対象課題について

- (1) 事前評価課題 次年度新規に実施予定の研究課題（16課題）。
- (2) 中間評価課題 現在実施している研究課題（37課題）。
- (3) 事後評価課題 普及に移した研究課題の内、概ね3年を経過した課題（23課題）。

これらの課題の内、第三者評価会議での対象課題は、センター研究監理委員会によって選出された、以下の5課題を対象としました。

～評価委員による各課題の総合評価と主なコメント～

1) 全体を通じての講評

- ・どの課題も、生産者支援、環境負荷軽減、安全・安心な農産物の供給等の様々な観点に十分配慮された研究がされており、成果があがっている。
- ・研究結果を基に事象のメカニズムを解明するような基礎的な研究も必要。
- ・国と他県と一緒に共同研究機関として県はどういう役割をもっていくのか明確化すべきである。
- ・県の生産者と消費者にどう活かせるのか、具体的な目標を明確にする必要がある。

2) 各研究課題の評価（5名の評価委員の平均値で記載）

評価 3：達成（非常によい、大いにある）、2：ほぼ達成（よい、ある）、1：達成不十分（よくない、乏しい）

[事前評価]

(1) 誘引捕獲器と天敵を活用したハウレンソウケナガコナダニのIPM体系の確立

評価基準	評価	評価委員の意見
(1) 研究の必要性・ニーズ(生産者・実需者・消費者・行政課題)	3	安全・安心なハウレンソウ生産にとって必要な栽培技術である。本県におけるハウレンソウは中山間地の重要な産物であり、ケナガコナダニ防除対策は生産農家にとって必要性は高い。
(2) 研究方法の妥当性	2	コナダニの生態解明による防除方策の組み立てがよい。捕獲器の性能アップがポイント。天敵・カブリダニ類に影響のない薬剤の検索が必要ではないか。
(3) 研究推進体制	2	奈良県の分担役割が明確でない。広範な地域農試の参画で研究の深化が期待できる。
(4) 研究の独創性・新規性	3	土中に生息する虫を誘引捕獲器で被害軽減、密度低下が図れば、画期的。モニタリング用としての捕獲器では新規性がない。モニタリング装置がもっと簡単になればよりよい。
(5) 学術的寄与・発展の見込み	2	基礎的研究と応用研究の両方が推進されれば学術的貢献が大きいのと思われる。研究の深化により効率的な総合防除技術が期待できる。
総合評価（課題の妥当性）	3	各研究機関の得意な分野を活かすことでレベルの高い技術が開発されることが期待できる。天敵、IPM適合農薬の検索等の合わせ技が必要ではないか。資源循環型農業の推進に大きく期待できる。なお、単価を出来るだけ抑えることも十分考慮願いたい。

[中間評価]

(2) 県浄水場の浄水ケーキをリサイクル利用した水稻育苗技術の開発

評価基準	評価	評価委員の意見
(1) 研究の必要性・ニーズ(生産者・実需者・消費者・行政課題)	2	とてもよい研究に目をつけられている。研究が進展しているが、ムレ苗の発生、マット形成が悪い等の物理的・化学的特性をもう少し詳細に調査すべきである。
(2) 研究方法の妥当性	2	水稻育苗だけで浄水ケーキに関係する問題が解決できるのか疑問である。無料で用土が入手できるメリットが生産者にある。廉価、安定供給出来る体制の整備があるのでは。行政としての産廃費用の削減に効果が期待できる。
(3) 研究推進体制	2	研究の目的が特殊であり学術的な発展は期待できない。安定した用土になれば、野菜、花き類への適用が見込める。
総合評価 (課題の妥当性)	2	達成度は50%程度と思われる。資源の有効利用による廃棄物削減、かつ生産者にはコスト負担がない多目的の研究課題である。

[中間評価]

(3) 定植と同時収穫を目的としたカキの超短縮育苗と生産システム開発

評価基準	評価	評価委員の意見
(1) 研究計画の進捗状況	3	目標達成のため研究が着実に進められている。研究の成果物(苗木)が現場に定植されるよう、効率の良い試験がなされている。苗生産業者、研究会までの技術の受け渡しが明確。
(2) 研究成果の波及見込み(生産者・実需者・消費者・行政課題)	3	カキの更新技術として期待が大きい。キャッチフレーズの「桃、栗3年、カキ3年」は産地の活性化の起爆剤になれば成功。
(3) 学術的寄与・発展の見込み	2	接ぎ木時期が限られていたのを打破したことが評価できる。果樹の育苗技術のための学術的な寄与が期待できる。他の果物(みかん、デコポン)にも応用してほしい。
総合評価 (目標達成度)	3	優良苗が短期間にしかも市販並みの価格で安定生産できれば大成功。進捗状況はよくほぼ実用化できるレベルに達していると思われる、成果が確実に得られている。今後の実証実験に期待する。

[事後評価]

(4) ベンチ無仮植育苗によるイチゴの良苗生産技術

評価基準	評価	評価委員の意見
(1) 研究計画の進捗状況	3	本県における主要農産物のイチゴ生産農家にとって大きな課題に向けての研究であり、大きい効果あり。技術の完成度は高い。いかに低コスト、簡易化できるか。培地素材の検討が評価できる。
(2) 研究成果の波及見込み(生産者・実需者・消費者・行政課題)	3	県下イチゴ生産農家の既に約18%がこの方法を用いておりそれなりの成果がでている。
(3) 学術的寄与・発展の見込み	2	既往の試験の総合化で新規性は少ないが実用化技術として評価できる。
(4) 成果の公表、特許・種苗登録の可能性	2	奈良県内だけでなく全国に発信すべき成果である。システム全体としての特許の可能性はあるが、既に公表されているので無理か。
総合評価 (目標達成度)	2	完成度の高い技術で広く普及させるかが課題。病害虫の発生や使用済み培地の処理、高設栽培システムへの適用もすすめてほしい。

[事後評価]

(5) スミレ類根腐病(鉢花類黒根病)の総合防除技術の開発

評価基準	評価	評価委員の意見
(1) 研究成果の内容	3	環境保全という時代的要請に合った内容でハエによる新たな伝染経路を解明したことと、簡易検査法の確立、総合防除法を確立したことが評価できる。
(2) 研究成果の波及・実用化の状況 (生産者・実需者・消費者・行政課題)	3	セルトレイの消毒装置の開発普及、生産者ハウスでの成功例は広範な波及効果が期待でき、実用化が認められている。
(3) 学術的寄与度・発展度	2	既往のデータを参考に本病の生態解明がなされた。
(4) 成果の公表、特許・種苗登録の可能性	2	広範囲の育苗に関係するもので圃場衛生の大切さを啓発する資料になる。
総合評価 (目標達成度)	3	現場で総合防除技術が実証されまた既に30戸以上の県内農家に普及定着し研究目標がほぼ達成されている。